

小学校外国語科における継続性のあるやり取りを目指した授業

—学習者用デジタル教科書の活用を通して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 藤木真里佳

1. 問題と目的

(1) 本研究の根底にある問題意識

①継続性のあるやり取りの指導の難しさ

「すらすら話せるようになりたい。すらすら英語が出てくるようにしたい」。筆者がこれまでに何度となく耳にしてきた児童の言葉だ。筆者の周囲の限られた範囲ではあるが、このような児童の言葉をよく聞くと口にする教師は少なくない。

しかし、筆者はこれまで「すらすら話すこと」をねらって授業を仕組んできたつもりはなかった。やり取りの領域において、気持ちや考えを伝え合う活動にすることを大切にしてきた。やり取りしている2者間で、相手の話していることに想像力を働かせながら会話を紡ぎ、気持ちや考えを伝え合うことである。これは単なる定型文を暗記したよどみないやり取りではなく、思考錯誤しながら気持ちや考えを交換しあうことである。このことは、思考力・判断力・表現力とも関係する。「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」(文部科学省, 2020)では、対話を続けるための基本的な表現例として、①対話の開始, ②繰り返し, ③一言感想, ④確かめ, ⑤さらに質問, ⑥対話の終了, (番号は筆者が追記)の6点が提示されている。このことから、継続性のあるやり取りの指導が求められていることがわかる。

では、“すらすら”英語を話せるようになりたい、という児童の思いを大切にしながら、やり取りを継続する指導をどのように仕組んだらよいのだろうか。“すらすら”会話することができたという思いを持つことができれば、児童の英語学習に対する意欲や自信がうまれるのではないだろうか。

②先行研究を踏まえた実践からの気づき

泉(2017)では「対話を構成する方略的能力は、小学校段階で育成すべき重要な構成概念である」とされ、方略的能力を育成することは、学習者の不安緩和や認知・意欲の向上、相手意識を持ったコミュニケーション・協働的な学び合いに効果的に働くことが示されている。さらに、成功体験を積み重ねることで、コミュニケーションの積極的な態度を育成することにもつながるとされる。そこで筆者は、この先行研究で提示された3段階の育成モデル(図1)に沿って明示的な指導をすることにした。

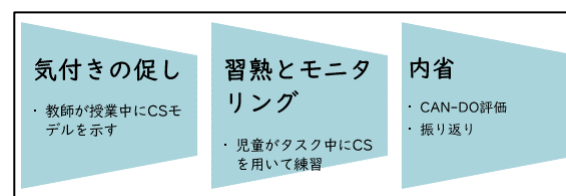


図1 育成モデル※筆者が整理したもの

以降で述べる実践に先立ち、1学期(令和4年6~7月)の8単位時間、授業の10分間でsmall talkを扱い指導した。その結果、これまでの自分自身のやり取りにおけるリアクション、つまり文部科学省(2020)でいう③一言感想について振り返る児童が多かった。以下に振り返りシートの記述を示す(原文のまま)。

- ・「ふつうに話すより、リアクションをそえて話すと話しやすい」
- ・「自分の気持ちを伝えると話しやすくなるから入れたほうがいいんだと思った」
- ・「リアクションがとれていなかったから、リアクションを入れたい」

先に述べた「すらすら話せるようになりたい」という児童の思いには、よどみない一往復の会話ができればよい、という気持ちに留まらず、繰り返しや一言感想も交えた、ある一定程度継続性のあるやり取りをすることも含まれるものと考えられる。

泉(2017)の育成モデルに沿った授業を行うことに加え、他の指導を検討・実践することで、児童のなりたい姿に寄り添い、意欲や自信を引き出す変化を促すことができるのではないだろうか。

③学習者用デジタル教科書の登場

筆者は、これまで、教科書で使用されているやり取り例を基本として、話すこと(やり取り)の指導をしてきた。それは、下に挙げる3点の良さを実感しているからである。

- ・はっきりした場面設定がされた中で登場人物が自然な会話を繰り返し広げていること
- ・全く同じものを繰り返し見られること
- ・特別な教材準備をしなくても指導ができること

筆者が勤務する小学校では、光村図書の『Here We Go!5』を使用している。Unit1~9のアニメ教材(Let's watch1 および2)において、登場人物たちの会話往復数を数えてみると、単元によって多少のばらつきはあるものの、基本的には2人の会話で、平均2.2往復であることが分かった。また、会話は、質問・確認・応答・一言感想によって構成されていた。これは、文部科学省(2020)で示されている対話を続ける基本表現に相当する。

しかし、音声の基本とした学習が基本である小学校外国語科では、教科書紙面にこれらのやり取りは示されていない。児童がやり取り例を聞くためには、教科書紙面に掲載されているQRコード読み込んで聞くのみであった。

そんな中、2022年4月、学習者用デジタル教科書が全国の公立小・中学校に導入された。これは、指導者用デジタル教科書とほと

んど構成が変わらない機能を持つものである。このことにより、児童・生徒は一人一台端末で自由に使用できるようになった。

話すこと(やり取り)領域において、「すらすら話せるようになりたい」という児童に対して、泉(2017)の育成モデルに沿った実践に加えて、他の指導方法を検討していた筆者は、学習者用デジタル教科書を活用して実践することに挑戦したいと考えるようになった。

(2) 研究の目的

本研究は、学習者用デジタル教科書を活用した話すこと(やり取り)領域におけるものである。まず、学習者用デジタル教科書の特徴を整理するとともに、使用する際に提示したい使い方を探る。次に、継続性のあるやり取りの指導を目指し、学習者用デジタル教科書を活用した実践を提案する。

2. 学習者用デジタル教科書の特徴の整理

学習者用デジタル教科書は、山梨県では令和4年度よりすべての公立小中学校において導入が開始された。以下、児童が使用するに当たっての特徴を整理する。なお、筆者が分析した学習者用デジタル教科書は、光村図書「Here We Go!5」である。）

(1) 音声教材の視聴

指導用デジタル教科書で再生できるものは、もの、動画教材(STORY, Let's watch, World Tour 等)・リスニング教材(Let's Listen)・チャンツ(Let's Chant)・歌(Let's sing)であり、は、学習者用デジタル教科書でもすべて再生することができる。また、0.75倍、1倍、1.25倍と再生速度の調整や、日本語字幕・英語字幕を表示することが可能である。

(2) デジタル教科書への記録・書き込み

リスニング教材等の答えについて、児童自身が記入、各自で答えの確認をすることができる。さらに付箋機能を使用し、自分の考えや追加情報を記入することができる。

(3) 単語調べ・単語練習

新出単語・新出表現について、文字表記の確認に加え音声再生ができる。単語については、イラストや文字の表示バランスの調整も可能である。

3. 個別学習における使用の可能性と学習方略

これまではイラスト中心の紙面のみで、個別で学ぶには文字に関する学習がほとんどかつ限定的だったが、音声や動画を児童自身がそれぞれで再生することができるようになり、授業で扱われている教材をそのまま使用することができるようになった。学級全体でしかできなかったことが、児童一人一人が自分の学習ペースや課題に応じて学ぶことが可能となった。

学習者用デジタル教科書を活用する場面に授業に組み込む際、学級・集団で学ぶ内容と個人で学ぶ内容とを整理・区別・すみ分けし、学級では協働的に学ぶよさをいかした授業展開をすることによって、英語の学びがさらに発展していくことが期待できる。知識・技能面の習得が土台になっている教科書の学習については、個別学習によっても補い、協働的に学ぶ授業では思考力・判断力・表現力を育むような時間に充てることができよう。

加えて学習者用デジタル教科書が導入されたということは、どのように学習者用デジタル教科書を活用してほしいかという教師側の願いを伝えることも大切だと考える。英語学習は、音から文字へと展開されていくことが求められるが、小学校段階では特に顕著である。筆者は、学習者用デジタル教科書を使った個別学習を仕組む際に、以下のことを児童に伝えている。

- ・どのコンテンツを使用しても構わないが、少し難しいと感じるものにも挑戦する。
- ・日本語字幕を表示したい時は、字幕が表示されていないものを10回は聞いて、内容を推測してからにする。
- ・再生して聞こえたことを積極的に口にする。

4. 実践と方法

(1) 対象・期間・単元

- ①対象 山梨県内の小学校
第5学年1学級22名
- ②期間 令和4年10月～11月
- ③単元 I want to go to Italy.(全8時間)
Here We Go!5

(2) 継続性のあるやり取りを目指した指導の全体像

教科書に掲載されているアニメ教材、Let's watch を活用した。Let's watch は Step1・2に分かれている。会話文は以下の通りである。

Step1
 Shota: What country is this, Ms. Miller?
 Ms. Miller: Oh, it's Peru. In Peru, you can visit Machu Picchu.
 Shota: Machu Picchu? Wow. It's cool.
 Ms. Miller: That's right. It's old, too. I want to go to Peru next.

Step2
 Ms. Miller: Where do you want to go, Nick?
 Nick: I want to go to Italy.
 Ms. Miller: Oh, Italy? Why?
 Nick: I want to see soccer games there.
 Ms. Miller: Wow. Cool. You like soccer?
 Nick: Yes. I play soccer after school.

この会話文をベースに、3段階のスマールステップを設定し、最終的には自分自身の気持ちに即したやり取りをするようにした。なお、これらの一連の流れを、児童にとって親しみやすいように「アテレコチャレンジ」と呼ぶことにした。

表1 単元計画

チャレンジ1(2・4時間目)
なりきり会話 登場人物になりきり、アニメに声をつけよう
チャレンジ2(3・5時間目)
なりきり会話+1

この後の会話を推測して、Ms. Miller 役が一言追加しよう

チャレンジ3(6時間目)

Let's Talk

自分の気持ちをのせて、友達とやり取りしよう

「アテレコチャレンジ」のために、2～6時間目で、5～8分を帯活動として充てることにした。チャレンジ1は児童自身が動画に収めるようにし、チャレンジ2・チャレンジ3は、相手を変えながらやり取りするようにした。また、役割は固定せず、交代で経験することにした。なお、チャレンジ2ではペルー、ブラジルについて話すため、事前に調べ学習を行った。

(3) データ収集の手続き

①行動観察・振り返りシートの記述

定点ビデオを設定し、毎時間の授業記録を撮影した。また、授業の終末に振り返りシートを記述する時間を3～4分間設定した。項目は「今日の学習で考えたこと」「次に頑張りたいこと」とした。

②事後アンケート調査(n=22)

2学期末に、話すこと(やり取り)関わる本実践についてアンケートを行った。

<話すこと(やり取り)に関わる情意面>

前までの自分と比べて、会話を続けられるようになりましたか。また、それはなぜですか。

「会話を続けられるようになった」「まあまあ続けられるようになった」「かわらない」「あまり続けられなくなった」「続けられなくなった」の5件法で調査をおこなった。

<本実践の核となるアテレコチャレンジ>

アテレコチャレンジは楽しかったですか。また、それはなぜですか。

「楽しかった」「まあまあ楽しかった」「あまり楽しくなかった」「楽しくなかった」の4件法で調査をおこなった。この項目により、学習

者用デジタル教科書を活用して、継続性のあるやり取りの指導を行った結果を、質的に分析することとした。

②パフォーマンステスト時の動画資料

本単元後終了後、2学期末にALTと一対一のやり取りパフォーマンスを行った。パフォーマンス課題は以下の通りである。

<2学期末>

ALTの先生ともっと仲良くなるために、行きたい国について話してお互いのことを知ろう。

パフォーマンス時のやり取りを観察するとともに、抽出児2名について文字起こしした。なお、1学期にもALTと児童とで一対一のやり取りパフォーマンスを行っている。その様子と比較することにした。

<1学期末>

ALTの先生が喜んでくれるThank you cardを贈るために、必要な情報を集めよう。

5. 結果

この節では、チャレンジ1, 2, 3における児童の様子や振り返りシートの記述、また、事後アンケートの結果について記す。これらについての全体的な考察は次節で示す。

①行動観察・振り返りシートの記述から

<チャレンジ1>

児童は、帯活動の「アテレコチャレンジ」に意欲的に取り組んでいた。ペア同士で役割を分け、はじめは0.75倍の速度でLet's watchを再生し、声を合わせていた。表現を難しく感じたときには、その部分を繰り返し再生して集中的に練習している様子もみられた。うまく言えるようになると、1倍、1.25倍と再生速度を上げてチャレンジしていた。アニメの登場人物になりきって自分の声を似せさせるといった工夫が見受けられた。

<チャレンジ2>

①Step 1

以下は、実際の児童のやり取りである。
※二重線部は、+1で追加されたところ

Shota 役: What country is this, Ms. Miller?

Ms. Miller 役: Oh, it's Peru. In Peru, you can visit Machu Picchu.

Shota 役: Machu Picchu? Wow. It's cool.

Ms. Miller 役: That's right. It's old, too.

I want to go to Peru next.

Do you want to go to Peru?

Shota 役: Yes, I do. I want to go to Peru.

I want to see alpacas.

Ms. Miller 役: I see.

Shota 役: What country is this, Ms. Miller?

Ms. Miller 役: Oh, it's Peru. In Peru, you can visit Machu Picchu.

Shota 役: Machu Picchu? Wow. It's cool.

Ms. Miller 役: That's right. It's old, too.

I want to go to Peru next.

Do you like Peru?

Shota 役: Yes, I do.

Step1の「なりきり会話+1」では、+1の質問に行き詰まってしまう児童が多かったが、会話を継続できたペアは、“Do you want to go Peru?” “Do you like Peru?”と質問をしていた。それに対して Shota 役は、“Yes.”もしくは“No.”で応答することが精いっぱいの子が多かった中、日頃から積極的にやり取りをしていた数名の児童は、上記に示したように自分がしたいことを伝えていた。

②Step2

Ms. Miller 役: Where do you want to go, Nick?

Nick 役: I want to go to Italy.

Ms. Miller 役: Oh, Italy? Why?

Nick 役: I want to see soccer games there.

Ms. Miller 役: Wow. Cool. You like soccer?

Nick 役: Yes. I play soccer after school.

Ms. Miller 役: Great!

Ms. Miller 役: Where do you want to go, Nick?

Nick 役: I want to go to Italy.

Ms. Miller 役: Oh, Italy? Why?

Nick 役: I want to see soccer games there.

Ms. Miller 役: Wow. Cool. You like soccer?

Nick 役: Yes. I play soccer after school.

Ms. Miller 役: Nice soccer player.

Step1のやり取りに比べ、Ms. Miller 役の児童の応答はスムーズだった。さらに Nick 役の児童が“Where do you want to go?”と質問を追加し、やり取りを継続しているペアがいた。

<チャレンジ3>

①Step1

会話文は国旗を尋ねる表現からスタートするため、その特徴をふまえ、授業の冒頭でブラジルについて話題にすることとした。会話を始める前に、ブラジルでできることを全体で考えた。すると児童は「“meet Neymar”ネイマールに会えるかも」「コーヒー飲めるんじゃない? “drink coffee”かな」「“see soccer games”!」「アマゾン川も見れるかも」「キリスト像もある」と、ブラジルでできそうなことについて次々と考えを広げていた。

ペアを交換しながらブラジルでしてみたいことについてやり取りする時間を設けた。さらに、やり取りが行き詰まっていたペアのやり取りについて、全体で検討することにした。

S1: What country is this?

S2: Oh, its Brazil. In Brazil, you can drink delicious coffee.

S1: Delicious coffee? … … It's cool. じゃおかしい。一言感想どうしたらいいんだろう。

S1は、コーヒーを飲んだことがないため、どのように言葉を返したらよいかわからなかったと言っていた。すると、他の児童から““Oh, really?”と言ったらいいのではないか」「僕だったら“I like coffee.”と言うよ」「コーヒーは苦い

って言うから，“It’s bitter.”でもいいかもしれない」と返答例が挙げられた。

②Step2

実際に行われた2ペアの会話文を示す。

ペア①

S3: Where do you want to go ?

S4: I want to go to Singapore.

S3: Why?

S4: I want to see マーライオン

S3: I see.

ペア②

S5: Where do you want to go?

S6: I want to go to China.

S5: China? Why?

S6: I want to eat Chinese foods.

S5: Oh, me too.

2ペアのやり取りを全体で聞いたあと、よかったところについて尋ねると、「言葉を繰り返していたところ」「反応していたところ」と児童から挙げられた。さらにペア②の会話をもっと継続させるとしたら、どんな質問ができそうか問いかけたところ、「チャイニーズフードで何が好きか聞いたらよさそう。“What Chinese foods do you like?”」「でもそもそも中華料理を好きかわからないから，“Do you like Chinese foods?”と先に尋ねたほうがいいのではないかと考えが挙げられた。

振り返りシートには、チャレンジ3のStep2に関わる記述がみられた。以下に示す。

- ・いろんな友達と話せて楽しかったけど、リアクションすることがまだ難しい。
- ・相手を変えて何度もやり取りしているうちに、会話するときのとまどいがなくなってきた。
- ・coffee だったら drink かな、と考えなくても言えるようになってきてうれしい。
- ・質問はできるけど、応答や一言感想はもっとがんばりたい。
- ・質問・応答・一言感想を入れて会話ができた。

・やり取りを続けられるようになった。もう少し質問を続けられるようになりたい。

②アンケート調査から

A~I を抽出見とし、アンケートにおける記述を示す。「会話が続くようになったか」の質問において、各回答項目から無作為に選んだ。

<話すこと(やり取り)について>

前までの自分と比べて、会話を続けられるようになりましたか。また、それはなぜですか。

なった 54%(12人)

A)「なりきり会話」をできるようになりたくて、繰り返し練習したから、尋ね方など言えるようになった。

B)ペアの友達が教えてくれたから。また「なりきり会話」を何度もしたから。

C)「なりきり会話」が、会話の練習になった。アテレコした動画を見て、自分の声をしっかり聞いたから、直すところもわかった。

まあまあ続けられるようになった 32%(7人)

D)Step1の「なりきり会話」のときに、何回も練習してキャラクターになりきって話せるようになった。

E)「なりきり会話」や「なりきり会話+1」のときに、発言した。言わないときより覚えられた。

F)どういうふうを受け応えをすればいいかわかるようになった。

G)アニメの声を自分で再生して、何度も練習できたから。

かわらない 14%(3人)

H)これまでの学習のときにも思うように話せていたから。

I)アテレコチャレンジをしたほうが、会話は続くようには思うが、まだ途中でつかえてしまう。

<アテレコチャレンジについて>

アテレコチャレンジは楽しかったですか。また、それはなぜですか。

楽しかった 82%(18人)

A)言えるようになって、うれしかった。楽しく学べた。

- B)勉強になったから。
 C)キャラクターになりきって会話したのが楽しかった。
 D)友達と英語で話を続けられたことが楽しかった。
 E)キャラクターになりきって、そのキャラクターになりきって言うのが楽しいから。
 H)いろいろな人とできた。
 まあまあ楽しかった 14%(3人)
 I)半分楽しくて、半分不安。キャラクターになりきって言えたときは、達成感があった。でも、ちゃんと言えるかは不安だった。
 あまり楽しくなかった 4%(1人)
 G)言うのが難しかったから。

③パフォーマンステスト時の動画資料

②で抽出した児童のうち、上位層に属するC児と下位層に属するF児のやり取りを示す。

【C児】(上位層)<2学期>

ALT: Where do you want to go?
 C: I want to go to Canada.
 ALT: Oh, Canada. O.K. Why?
 C: I want to buy maple syrup.
 ALT: Do you like maple syrup?
 C: Yes. … Yes, I do.
 Where do you want to go?
 ALT: I want to go to Australia.
 C: Australia? Why?
 ALT: I want to see koalas and kangaroos.
 C: Oh, me too. Do you like koalas?
 ALT: Yes, I do. I like koalas. They are cute.
 And I want see Sydney Opera House.
 C: Cool!

<1学期>

C: What animal do you like?
 ALT: I like kiwi. Do you like kiwi?
 C: So-so.
 ALT: I see. What character do you like?
 C: ….
 ALT: I like ジャイアン. How about you?
 C: I like ドラえもん.

ALT: Nice! What subject do you like?
 C: I like math.
 ALT: I see. Do you have one more question?
 C: What color do you like?
 ALT: I like blue. What color do you like?
 C: I like white.

「1. 問題と目的」の項目でも示したように、児童は、文部科学省(2020)で示されている基本的な表現例③一言感想の重要性を感じてはいた。しかし、実際のやり取りでは使用されていなかった。2学期は、下線部のように、質問を投げかけたり、相手が言ったことを繰り返して確認したり、感想を述べたり、さらに質問を追加したりしながら会話を継続していた。

【F児】(下位層)<2学期>

ALT: Well, where do you want to go?
 F: I… I want to…Australia.
 ALT: Australia? Why?
 F: See animals.
 ALT: What animals do you want to see?
 F: Kangaroos. Where do you want to go?
 ALT: I want to go to England.
 F: England? Why?
 ALT: I want to eat Fish and Chips.
 F: … Do you like fish?
 ALT: Yes, I do. How about you?
 Do you like fish?
 F: No.

<1学期>

F: What fruit do you like?
 ALT: I like mango. What fruit do you like?
 F: I like bananas.
 ALT: I see. What color do you like?
 F: I like…blue.
 ALT: I see. Do you have one more question?
 F: What color do you like?
 ALT: I like blue, too.
 F: …Thank you.

F児は、1学期はALTに促されてひとつ質問をしたが、2学期は会話を展開しながら自然に質問を投げかけていた。②アンケート項目で

も、F児は「どういうふうに受け応えをすればいいかわかるようになった。」と答えていた通り、その姿がパフォーマンスで現れていた。

6. 考察

本実践で行ったアテレコチャレンジは、児童の話すこと(やり取り)について、情意面に効果的に働いたといえよう。キャラクターになりきるという単純な楽しさが作用していたことは、アンケート結果から明らかである。加えて、「できた」ことが非常に分かりやすく、友達と協働的に学ぶことができることも大きな意味をもつ。

では、継続性のあるやり取りの点についてはどうだろう。アンケート結果によると「以前に比べて会話を続けられるようになった」と肯定的に捉えている児童が多いことから、アテレコチャレンジを通して成功体験を得ることができたと言っても差し支えなからう。これは、学習者の話すこと(やり取り)に対する不安緩和・意欲の向上につながるものと考え。1学期と2学期のやり取りパフォーマンスの比較から、やり取りの継続性も向上しているように思われるが、パフォーマンス課題が変わっても、同じように継続性のあるやり取りができるかどうかまでは調査することができなかったため、はっきりと成果があったと明言することは避けたい。質問・応答・一言感想を自由自在に運用しながらやり取りする会話方略は、一朝一夕で身に付くものではない。今後も、自分の思いや考えを伝え合うことができるテーマのもと、言語活動を通した学びを繰り返し、継続性のあるやり取りができるように場を設定したい。

アテレコチャレンジは、指導者側の特別な準備を必要とせず、また指導経験にも大きくは左右されずに誰でも行うことができる活動だと考える。若手指導者や外国語科の指導に自信がない指導者にもできる実践であろう。しかし、実施時期については気を付けたい。アテレコチャレンジは、登場人物の会話モデルから学ぶ活動のため、会話方略がまだ身につけていない学習者にとって有効だと考える。外国語活動及び

外国語科学習での初期段階において、ひとつの単元で導入することが望ましいだろう。

継続性のあるやり取りを目指す上で欠かすことができないものがある。それは、質問力だ。これまでに学習してきた表現を用いながら、相手の気持ちや考えを引き出すことができるような質問をする力を、今後は授業を通して鍛えたい。そのために、中間指導を大切にするとともに、柔軟なやり取りができるように指導者自身も指導力を向上していくことが求められよう。これらは、思考力・判断力・表現力を育成することにもつながるものと考え。

本研究では、学習者用デジタル教科書を活用した。児童は、授業で分からなかったところやもっと挑戦したいところについて、家庭学習でも取り組むようになった。本実践で行ったアテレコチャレンジを家でも取り組んでいるという話も聞く。このように、学習者用デジタル教科書を通した学び方を児童が獲得することができれば、音声による学習をベースとしながら、より一層の英語力の向上が期待できる。また、そのことにより、学校で協働的に学ぶ内容や質も大きく変わってくるだろう。

7. 最後に

児童がよく口にする「“すらすら”話せるようになりたい」という願いは、英語に対する憧れではないだろうか。この憧れは、学びの意欲づけとなる。継続性のあるやり取りの指導について今後も研鑽を積むとともに、やり取りの中で「質問力を鍛える」ことについても考えたい。

引用文献

- ・泉恵美子(2017). 小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導. 京都教育大学教育実践研究紀要. 第17号.
- ・小泉仁ほか(2019.3.検定). 光村小学校外国語科英語 507 第5学年用 Here We Go!5. 光村図書.
- ・文部科学省(2020). 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック. 開隆堂.